

## 宗教の歴史性

——キリスト教、仏教、及び他の諸宗教の出会いの場——

ゴードン・D・カウフマン

真正裏(訳)

ユダヤ教とキリスト教は他の主だった宗教的伝統とは異なり歴史というものに大きな関心を払って来たということはよく主張されることである。ユダヤ教とキリスト教はその独自な見方に従って世界というものはその性格上基本的には歴史的なものであると考えるに至ったのであり、従つて世界は恒久的かつ静的な構造をした不变の存在であるとも、或いは又万物がそこから出てそこに帰するところの無というものが不斷に変化してゆく表現であるとも考えなかつた。従つて他のあらゆるもののが依存するところの根本的実在は一つの歴史的主体 (historical agent)、つまり神(God)と見なされ、その神は世界とその内容物を始めて創り出したばかりでなく、全ての有限なものが経なければならない歴史的展開の過程をも支配している。そして世界は神が世界のために定めた終末論的目標(eschatological goals)の実現に向かつて進行しているのである。特にキリスト教は神が人間イエスに顕現したという主張と共に、究極的なものが歴史の偶発性と過程に深く関わるその関わり方を強調して來たのである。そして更にキリスト教はこの様な点を強調するため、歴史の中で生じた人間の苦難を描く墮罪(fall)及び

罪 (sin) という教義を用いると共に、神の王国を天国と同様に地上にもたらすという救済の望みをも説いて来たのである。

この様に強調することがユダヤ教とキリスト教の伝統を或る意味でユニークなものにするのだと、又或る人が主張した様に、他の偉大な宗教よりも一層意義深いものにするのだという様な主張の是非を私はここで論じようとしているのではない。又、その性格上、基本的に歴史的であるキリスト教の一解釈を私はここで試みたいと思うわけでもない。私がやりたいことは、宗教の本質と宗教的思考を理解するために、人間の歴史性を根本的に解釈する立場 (a radical interpretation of human historicity) の意味を明確に説明してみることである。

例えば、私の書いた「組織神学」(Systematic Theology: A Historicist Perspective, 1968) の中で例証されている様に、私は初期の神学研究作業においてこれらの諸問題を現在ほどには根源的に理解していないかった。当時私が歴史的又は歴史主義的世界観 (a historical or historicist world-view) の様に見なしたかといふならば、それ

——の歴史主義的視点が意味したことは、信者であり神学者である我々人間は我々自身歴史的過程のただ中に身を置いているのだということであり、又それ故に我々の態度、価値、観念などの全ては決定的に我々の歴史的文脈によって条件づけられているのだということ、この様なことを私は認識したのだが、このことがキリスト教神学と他の宗教的思想を理解する上にどんな意味を持っているのかということについての私の認識は充分ではなかった。他のたいていの宗教思想家と同じ様に私が想定したことは、宗教思想のもつ第一の関心事は、その思想を育んだ特殊な伝統を打ち出し、それを周到に分析すること、そして又それぞれの新しい世代が直面する諸問題に照らしてその特殊な伝統を解釈又は再解釈することであつた。ところが、人間の歴史性の事実を見るとき、この様な（学問的）行為が疑問視されなかつたばかりではなく、その行為が厳密にはいかに続けられるべきかといふことについてはあまり多くの示唆は与えられなかつたのである。神学及び他宗教の思想は単に伝統の中で学問的作業を行い、その伝統の理解可能性 (intelligibility) を示

すことのみを関心事としたのである。つまり、この様なやり方で伝統というものを今日の時代にふさわしく有意義なものにするのを助けたのである。

確かにこの様な考え方には正当化される一面や正しい面が多くあり、殆どの宗教思想家はこの様な路線にそつて研究作業を続けているのである。しかしながら、この様な見解は私達が自分達の歴史的伝統を背負って生きていくということを前提にしながらも、次の様な事実がもつ完全な意味あいを理解しないのである。つまり、私達の歴史を創るのは私達人間なのであるということ、又、歴史的伝統によって形成され育まれる人間存在であるといふことは、どもなおさず人間自身が作り上げて來た様式 (patterns) と構造 (structures) によって形成されたり支えられたりする人間であるということであり、その様式と構造も人間が大幅に再構成 (reconstruct) したり変更 (transform) したりするかも知れない。いや実際にには、ある状況の下で人間が廃止 (dismantle) したり廃棄 (destroy) したりすることが絶対に必要であると見えずかも知れない様なパターンと構造なのである。(二)

は、存在するものの全ては歴史的過程のなかにあり発展ののである。私はこの歴史的又は歴史主義的世界観を、多かれ少なかれ、事物にかんする客観的な描写又は考え方として受けとめたが、それは人が描写してみようとするかもしれない他の世界観と同様、單に取つたり捨てたり出来る様なものだったのである。実在を歴史主義的に表現することは特別な意味でキリスト教信仰に属するもの——あるいは少なくともキリスト教の伝統から出て来たもの——であり、それ故に、歴史主義的に理解するといふとは、キリスト教神学者が研究作業をするための「所与」の一部であつたわけであるが、その所与とは、ある仕方で神の啓示に根ざしていると信仰が想定したものであった。

の様な事実のもつ意味を伝統的宗教思想は理解しないのである。宗教思想に関するこの様な伝統的な考え方はその研究の立場と意義において根本的に保守的である。つまり、本質的に言つて宗教的伝統を過去の世代から現代の世代へと引き渡す(*handing over*)過程の一部だけが自分の任務であるといふことは確かに私達人間の歴史性のもつ一つの意味ではあるが、そのことが宗教の理解にとって最も根本的なものでは決してないといふことに私は気づくに至つたのである。

この問題を今少し深く掘りさげるために、私は人間を完全に歴史主義的に理解することがどんなことなのかといふことを要約してみたいと思う。この様な見解に立つならば、我々の生活のパターンとか儀礼行為、習慣、価値(觀)、觀念、思考や瞑想の方法、世界觀など、これら全ては歴史の過程の中で人間によつて創り出されて來たものであると言える。非常に異なつた生活様式、非常に異なつた構造をもつた役割りと制度、非常に異なつた宗教的実践や体験など……これらは全て異なつた人間社

のであり、その様な文化的母体の中に出現する人間は、それぞれその文化的・宗教的觀念と関連しながら自分自身を考えたり形成したりするのである。どんな徳目が強調され、どんな惡徳が避けられるかは文化的・歴史的に見て相対的なのである。つまり、いかなる人間活動や芸術が美しいと評価されるのか、又は大切にされるべきか、又は獎励されるべきか、などといふことはその文化によつて決められることなのである。真理に関するいかなる主張が信用出来るものと見なされるか、いかなる様式の社会組織が正しくかつ適切なものと見なされるか、又人間の仲間をどの様に扱うことが正義にかない善いことであると信ぜられるのか、など、これらの全ての価値や理想は人生の方向づけと指導を与える(*orient and guide human life*)と共に、人間が直面するさまざまの可能性を評価するための基準の役割りを果たすのである。そしてその価値と理想は異なつた歴史的・文化的状況の中で異なる形体をとるのである。もし我々が人間は根源的に歴史的な存在(*radically historical beings*)であるという考え方を眞面目に受けとめるならば、世界における

会や異なつた歴史的時代の中で發生したものである。そしてこのことが意味することは、これらの社会や歴史的時代に成長した男女はそれぞれ異なつたやり方で人間形成を行い、異なる技術、関心、欲求、異なる様式の人間関係を持つたということである。簡単に言うならば、彼等(男女)は他の社会や時代に成長した場合とは全く異なつた人間となつたのである。この会場に居る我々の一人一人が仮に、例えばインドの村で低いカーストのヒンズー教徒として成長した場合、或いは中国中央部の自治体で一個人として成長した場合、或いは、ローマ皇帝の家族の一員として成長した場合、それぞれ全く異なる人間となつたことであろう。

歴史主義的理解决定した場合、人生において重要なと思われる——いや実際に重要なことである——のは、大まかに言って我々がその中で生きる文化の機能であり、又我が社会において果たすべく望まれている役割の機能なのである。善い人間生活とは何かという概念は、実際に意識された文化的・宗教的欲求(*felt cultural and religious needs*)と関連しながら一つの文化の歴史の中で發展する

人間のあらゆる願い、望み、そして人間理解の方法などは、それらの出現をもたらした社会歴史的状況(socio-historical context)に関連しているのだというのを我々は理解することになるのである。人間は誰でも食事をする。つまり人間は生き残るために食べなければならない。しかし人間は誰も他の動物の様に単に食物を消費するだけではない。すなわち、人間は箸、ナイフ、フォークを使って食べたり、或いは、例えこの様な器具を全く使わない場合でも、右手を使って左手を決して使わなければなりません。又特別な香辛料や調味料を使って調理するとか一日に三食を規則正しく摂ったり、二食や一食にしたり、文化に基づいて定められた時期と方法で断食したりすることもある。又他の文化では嫌われたり毒物と見なされる特殊な野菜や肉だけを食用として受け容れることがある。その他多くの例を挙げることが出来る。我々の行為は疑いなく常に生物学的欲求に対する反応と見られるが、ほとんどそれをとっても人間の行為は文化に基づいて形成されるのである——そしてそのことは人間の行為

が歴史的に見て相対的であることを意味している。このことはなかんずく宗教と呼ばれるものに関する真実なつれその行為は新しい局面を迎えたのである。世界に関する統一的な概念または像がより一層想像力のある詩的な人間 (the more imaginative and poetic individuals) に現われ始めたのであるが、その世界像は人間生存の状況 (the context of human life) を理解可能であり、把握可能である様に思わせたのである。すなわち、その世界像は人間に生存の状況が何であるかをより良く認識し理解する力を与えたのであるが、その結果人間はその状況に対してより効果的に適応し、その状況の中でより効果的に生きることが出来たのである。同様に現われ始めたのは、人間とは何か、人間の最も強い欲求は何か、これらの欲求を充たす方法は何か、ということについての考え方である。人間と世界に関するこの様な考え方の最も早い形は明らかに物語りや詩や歌であり、これらは世代から世代へと語りつがれ歌いつがれた。この様な物語り、詩、

宗教の歴史性  
ない、などと言うふうに人生は説明されるかも知れない。個人又は自己としての人間は、天上にある好ましい住まいから落ちて肉体に捕えられ、何とかそれから逃れる手立てを考えねばならないような靈魂なのであるといふように見られるかも知れない。或いはこれとは著しい対照を示すが、自我とか靈魂とかはその眞の意味において幻想とも、人間の無智の所産とも、又ヒンズー教で言うマーヤーのヴェールとも見られ、それらは正しい洞察によつて追い払うこと出来るのであり、かくして我々が歴然たる自我をもつているのだと言う誤った仮定から生ずる人間の深刻な問題を解決することが出来る、という考えもある。或いは又、人間存在は物体の原子の偶然の配列又は盲目的な進化の過程から生み出されたものともみなされるが、その進化の過程は同様に他の方向に向かうことによつて異なる様式を生みだしたかも知れないのである。人間はその歴史の流れにおいて多くの異なるたた世界觀を展開して来たばかりでなく、その世界の中に存在する人間とは何か、人間の中心的問題は何であり、その問題の解決策は何か、などということに関して多くの

歌などは人間生存に関する想像的画像 (imaginative pictures of human life) を提供し、人間が直面しなければならない諸問題、果すべき任務などを示した。つまり、人間男女はそれらによって自分達の住む世界がどのようなものであるか、人間の実存においてどんな力又は存在がもつことが出来たのである。この様な一連の物語りや歌を取り扱わねばならないか、ということに関する觀念をもつて、人生の意味を深く考える限り返し告げることにより、人生の意味を深く考えられ、この結果、世界と人間にについての理解をさらに明確にするための状況が与えられたのである。

人生というものは例えていうならば、人が無事家に帰ろうとして途中野獸や悪い怪物のいる危険な所を通つて行く旅の様なものとして眺められ得るし、又光と闇の勢力が行なう大戦争に参加することであるといふにも描寫され得る。又本質的に言って、一つの政治的集團において責任ある市民生活を送ることであるとか、神の王国における臣下の生活をすることであるとか、或いは次から次と続き決して終ることのない輪廻の一歩踏みすぎ

異なった考え方を開拓して来たのである。それぞれの偉大な文明——別々に存在した部族が正にそうであったが——は、人間存在を理解し、説明し、その方向づけをするためにその様な概念的又は写象的な枠組み (conceptual or imagistic frames) を一つ又はそれ以上にわたつて考え出したのである。そして人間は、实体とか人間とかいうものに関するこれらの洞察に従つて、人生、組織、価値、実践などに関する考えを形成したり再形成したりして來たのである。あなた方全てにわかつてもらえると信ずるが、私がここで話しているのは人類が有するもろもろの偉大な宗教的伝統についてである。人間はその宗教的実践、組織、儀礼においてこそ人生の指針 (orientation in life) を発見し、人間存在とは何か、如何に生くべきか、などについての説明を見出したのである。或いは、我々はむしろ次の様に言うべきである。つまり、人生における指針を探求することにおいてこそ、又、人間存在とは何か、人生いかに生くべきか、などについての理解に到達せんとする試みにおいてこそ人間は偉大な宗教的伝統をつくり上げそれを發展させたのである。この様にして

人類は人生に関して現在持つに至ったような様々な意味を発見し、これを人間生存に与えて来たのである。

実存に意味を与えるこの様な全体的な説明の枠組みは人間にとり不可欠なものである。我々が人生の方向づけを得て行為することが出来るのは、我々がその中で生き、行動しているところの文脈についてある概念又は先見の明を持つからであり、又その行動の文脈の中における人間の位置と役割についてある理解をもつてゐるからである。我々の経験において挿話的・断片的に起るものと一つの大規模な洞察へと統一し、組織し、総合する想像力というものがあつてはじめて我々は人間を包む全体的なものを把握し、理解し、説明しようと試みることが出来るのである。従つて、人間がその中で徐々に偉大な文明を創り出したところの様々に異なる地理的状況において、世界とその世界における人間の位置についての非常に多様な概念が発生したことは余り不思議なことではないが、それというのも、いくつかの偉大な文化的・宗教的伝統の中において、人間の想像力がますます異なる視点を生み出し、それを詳しく観察して行つたからである。

私はその様には思わない。私がここに描寫してきた歴史性といふものの現代的理解こそ、そして又世界觀とか概念的枠組みとかがもつ機能と重要性を現代的に理解することこそが、まさしく人間の重要な性質を我々に認識させてくれると共に、我々の宗教的言語・思想の占める当然の地位をも我々に認識させてくれるのである。より大きな概念的枠組み、又は世界像を想像力によつて構築するだろうか、という問いである。

私はその様には思はない。私がここに描寫してきた歴史性といふものの現代的理解こそ、そして又世界觀とか概念的枠組みとかがもつ機能と重要性を現代的に理解することこそが、まさしく人間の重要な性質を我々に認識させてくれると共に、我々の宗教的言語・思想の占める当然の地位をも我々に認識させてくれるのである。より大きな概念的枠組み、又は世界像を想像力によつて構築する。

ことを停止出来るとか、停止すべきであると考えるべき理由はないのである。なぜならば、人生を秩序づけ理解するために世界觀又は概念的枠組みを持つといふことは、過去における他の世代に対してと同じ様に現代の人にとっても重要なことなのである。従つて宗教とか宗教的思潮といふものは過去におけると同じくまさに現代も必要なのである——がしかし、今やそれらは明確に、そして本質的に人間の想像力による創造物 (human imaginative creations) として再構成されねばならないのである。そうすれば我々は宗教とか宗教的思潮を充分に批判的・自覺的活動 (fully critical and self-conscious activities) として、かつて可能でなかつた様な仕方で保持してゆくことが出来るのである。例えばキリスト教神学といふものは今や本質的に言って、現代の人間生活に対する方向づけの枠組みとして役立つ様な神的世觀を想像力をもつて構築せんとする試みであると理解されるに至つたのである。すなわち、キリスト教神学とは、明確にそして自覺的に言って、人間がその中に置かれている状況に関する解釈 (interpretation) 又は画像 (picture)

をつくりあげようとする試みであると同時に、その状況の中にいる我々の現代的実存に関する解釈又は画像をつくりあげようとする試みであるが、その中心又は焦点は神であり、他のあらゆるものはこの神との関連において理解されるべきことなのである。この神學的任務の中心は、勿論、我々が今日「神」という言葉によって意味することの出来るものを定義づけたり特色づけたりすることであるが、特に「神」概念が神祕的な起源を持つ觀念から出る用語によって表現されるばかりでなく、我々が今日生きている現実の世界にとつての究極的基準点 (the ultimate point of reference) としてそれが考へられるとき、いの様な神の定義づけと特色づけが神學的任務の中心となるのである。

私がここで少し話したいことは、この様な神概念の再構成においてキリスト教神学が特にどの様に見えるか、という点についてであるが、その理由は、これこそ私が最もなれ親しんでおり、又、私が第一に打ち込んでいた神學的伝統であるからである。この様にして、私が主張している様な種類の宗教的象徴の再構成というこ

とについての具体的な例があなた方に提供されることになるだろう。私が他の宗教的伝統をもつあなたがたに望んで止まないことは、私のこの様なやり方があなたの方の学問的作業にとつて何を意味するかということについて考えていただきたいということである。後ほど討議を行うことによつて我々は、この様な神学的方法の採択がどうの様な仕方で異なる伝統の代表者間に対話を促進させるであろうかを知ることが出来よう。

もし我々が人間の歴史性というものを私がここで強く主張して来た様な根元的な意味で理解するならば、我々はキリスト教信仰を他のそれぞれの信仰と同様、一つの視点 (one perspective), 一つの世界観 (one world-view) としてみることになるであろう。そして、この一つの世界観は、今日我々の注目と忠誠心を獲得しようと同様に競い合っている他の伝統と並んで、長い歴史の中で、又歴史を通して発展して来たのである。人がこの様に世界観の概念を自分自身の伝統にあてはめる時、自分の世界観と他の世界観とを区別すると同時に両者を関連づけるのである。このことは自分自身の伝統から少し距離をお

濃い宗教的思想を占めていたものとはむしろ違つた議題を我々にとりあげさせる様になる。今や次の様に問わねばならないのである。即ち、根本的なカテゴリー (fundamental categories) は何であるのか、検討中の世界観に構造、秩序、経験的な味わい、などを与えるといふの根本的な概念的・象徴的枠組み (the basic conceptual and symbolic framework) は何であるか、という問い合わせもある。これらのこととが確かめられ得るならば、その時こそ、人はこれらのカテゴリー——おそらく、それはむしろ完全に再構成されたもの——が、果たして現代の人間生存を著しく秩序づけ、それに方向づけを与えることが出来るかどうかを理解してみようとすることが出来るのである。

勿論、一つの世界観に十分な性格と意義を与えるものは複雑な様式をもつ制度や慣習、言葉や象徴、礼拝の言葉や道徳的主張、物語りや神話などであり、これらのは世代から世代へと引きつがれ、その世代に生きる人の経験を表現し、それを説明するのである。これらの表現、様式、実践は必ずしも同等の重要さをもつてゐる

いてみるとおり、自分の伝統に対しても適切でない打ち込み方をする事から一歩しりぞいてみることを意味する。例えば、キリスト教又は仏教の伝統はあらゆる人間にとつて究極的な救済の真理を充分に備えた源であり、従つて単にその主な主張が解釈され、(世代から世代へと) 引きつがれることだけが必要なのだ、という確信があるが、その様な確信に基づいて神学の研究作業をするのではなく、キリスト教神学者と仏教学者は本質的にはそれぞれ多くの視点の中の一つの、特殊な視点を認識し、それを統一することに専念を払つて来たのだとうことを我々は理解するに至るのである。この様な洞察によつてキリスト教又は仏教の思想に対する批判的質問が出されるが、それは、キリスト教信仰又は仏教的視点の主な教義又は観念は何であるか、今日、その主義や観念をいかに説明すべきか、などという質問ではない。それは、むしろ、人はいかにして一つの世界観、特にキリスト教又は仏教の世界観を統一し、人生に対するその意義をどのように評価するか、という問い合わせである。宗教的・神学的・哲學的・文化的・社会的・政治的・歴史的・地理的思想の任務に焦点をあてるこの様な方法は、伝統色の

わけではない。それぞれの世界観の基本的構造と性格を決めるものは、それに形と秩序を与えるところの幾つかの根本的なカテゴリーなのである。これらのカテゴリーは、儀式や瞑想、イデオロギーや物語りの中で用いられる言葉や象徴などのより大きな語彙によって結びつけられ、相互に関係づけられるが、その目的とするところは多くの世代がもつ経験の限りない変化とニュアンスを調整したり説明したりすることが出来る様な一つの全体像又は複合の像に対し具体性を与え、その細部を埋める」となのである。世界観を定義づける用語の基本的な配置 (the basic configuration of defining terms of a world-view) のことを私はそのカテゴリー構造と呼ぶのである。従つて私の意見ではキリスト教神学者がもつ今日の任務は、多種多様なキリスト教の制度、慣習、礼拝などをはじめ、多様なキリスト教哲学、神学、神話を開拓して、それら全てを性格づける基本的なカテゴリー構造に至ることなのである。

私の見解では、キリスト教的・神学的世界観の構造と特質は、

(Christ)、とくら四つのカテゴリーによって与えられる。この中で最初の三つ、つまり、神、世界、人間と、ユダヤ教とイスラム教の視点にとつても同様に中心的なカテゴリーなのである。これら四つのカテゴリーはキリスト教の実体に関する図表を描くための主要な水準点 (benchmarks) 又は基準点 (reference points) を提供する。或いは、比喩を変えて言つならば、これらのカテゴリーは主だったホックやフースナーの様なもので、それに経験、生存、解釈などというキリスト教の網状組織が結びつけられているのであり、又それが網状組織のもつ基本のパターンと性格を決定するのである。これら四つのカテゴリーのそれぞれについて少し述べてみると。

「神」は勿論、キリスト教的視点における究極的基準点である。キリスト教の伝統の中においてこの「究極的基準点」は、神を存在するもの全ての根源、あらゆる実在の究極的根柢、世界の創り主、歴史の支配者、などと語ることによって表現されて来た。伝統的なキリスト

ならないのである。勿論、キリスト教的世界観にとって、全てこのことは、ある意味で神の創造として理解されるべきことなのである。

第三番目の主要カテゴリーである「人間」は、この地球上に住み十分に自覚的にして創造的であり、自由をもつ生物であるが、それ故に、生きがために世界において意識的な人生指導を得ようとつとめなければならないのである。この様な人生指導は、これまでに我々が見てきた様に、人間が想像力を用いて世界像とか人間実存の解釈とかをつくりあげる時に得られるのであるが、その人間実存の解釈は又人間の経験と知識を正当に評価するというやり方で人間実存の基本的可能性や諸問題、更にその補助変数などを説明するのである。現代のキリスト教神学が背負う任務の主要な部分は何かと言えば、人間に適切な人生指導を与えるためには、いかに、そして、なぜ、その様な世界観と人間理解が「神」と「キリスト」への言及を必要とするのかということを示すことなのである。

第四のカテゴリーは「キリスト」であるが、それは一

教思想において、神は主として人格的又は行為者的実在 (a personal or agential reality) として考えられた。即ち、神の概念が作り上げられた時に用いられたモデルは人間だったのである。あらゆる人間の生存と思想のためにあるこの「究極的基準点」が今日いかに適切に想定され得るかといふことが現代の構築的神学 (constructive theology) にとって一つの大きな問題なのである。

カテゴリー構造の第二の用語である「世界」は、人の生存ということがその中で見られるところの全般的な状況に關係しているのである。キリスト教的視点に関する初期の神話形成的説明をみると、この状況は単に「天と地」(the heavens and the earth) として特徴づけられたのである。しかし、が現代生活において我々はその状況を想像を絶する広大な宇宙として、それが数億光年の広がりをもち、数十億年という古いものであると考えざるを得ないのである。この宇宙の中には数百万の銀河系があり、この銀河系の一つの中に地球に直接の環境を与えている太陽系があるわけである。ひるがえって、地球は複合の生態系であり、これなくしては人間生存は可能に

方では、神は実際には誰で、又何であるか、神の意志はいかに理解されるべきか、そして他方では、眞の人間性とは何か、ということについてそれぞれ明らかにするものであるとキリスト教徒が信じている様な我々人間の歴史における人物像である。イエス・キリストという歴史的人物像は、かくして、神と人間の理解に対しても具体性と特殊性を与え、それによって人間実存の方向づけにおいて何が規範的であるのかを明確に決定することになるのである。

この様なカテゴリーの四重構造 (four-fold categorial scheme) は世界内における人間生存についてなだれるキリスト教的理解の全てを定義づけ、決定するのである。キリスト教の語彙における他の言葉、例えば、罪、救い、教会、聖礼典、三位一体、信仰、希望、愛、創造、啓示、等々はこのカテゴリー構造の入念な仕上げ、又は肉づけであるが、この様にしてこの構造は、人間存在とは実際いかなるものか、人生は世界の中においてどの様に送られるべきか、人間の信仰、礼拝、愛、奉仕が何に向けられるべきか、などといふことについての十分な説

明又は描写を与えてくれるのである。

人間の歴史性についての根元的な概念を元にして研究作業をすることがキリスト教神学であると自己理解する神学——これは本日私がここで説明して来た様な神学であるが——は、このカテゴリー様式の四つの用語全てについて注意深く、思慮深く考察することを望むであろう。この様な神学はキリスト教の歴史に現れた神、世界、人間、キリストに対する異なる考え方から出来るだけ多く学ぼうとするであろうことは勿論、これまで行われて来た異なった主張に与えられ得る根拠をも理解せんとつとめるであろう。しかしながら、この神学はいくつかの大変むずかしい問題にも真剣な目を向けなければならぬのである。即ち、これらの見解の中でどれが人間にとつて破壊的であり、有害であり、抑圧的であり、それ故に悪であるか、どの見解が愛、創造性、平和、正義などを推進して来たか、どの見解が、それが教会生活の中でどんなに強力で重要であろうと、今や古めかしく誤解をまねくものであり、又他の時代の「神話体系」であるとみなされねばならないか、どの見解が我々自身の

現代的実存及びその問題点や可能性などについて適切で充分な、そして洞察力に富む理解を与えることを約束するか、などという問題である。要するに、あらゆる神学的主張、あらゆる宗教的イメージとシンボルは前の世代がもつた想像力による構築的活動の産物であるという認識のもとに、この神学はどの見解を採用するかを決める前に、伝統的な見解を注意深く、批判的に眺めることを望むであろう。

勿論この様な構築的神学は、キリスト教神学が過去において非常にしばしば行つた様に、自己の神学の主張を権威づけ、正当化するものとして神の啓示を請求するとということは出来ないであろう。この様な神学はそれ自身を人間の想像力による構築であると理解すると共に、人間がもつ他の見解とか宗教的・世俗的な視点や世界観から出される洞察、批判、修正などに対して自己を開いているのだという考えをもたねばならないであろう。しかし、たしかにこのことは利益でこそあれ、損失ではないのである。我々の神学的記述と主張は單に我々自身のものに過ぎないと——つまり、それは研究と思

素における我々自身の勤労の所産であり、想像力をもつて世界と世界の中の人間の位置を予見しようとして我々自身のもつ自発性と創造性が産みだしたものであるといふこと——を率直にかつ適切に認めるることは、宗教的伝統の殆んど全てを特徴づける権威主義への誤ったそして非常に安易な動きから我々を解放することであると同時に、我々自身が直接うけついだ遺産の外側に横たわる幅広い規模の経験、人生、洞察などに対して我々の心を開くことでもある。

宗教的主張といふものは、常に人間の経験と觀念の公開売り込み市場（open marketplace）において最終的に自分自身を証明しなければならなかつたのである。つまり、啓示に関する権威、又は特別な洞察、悟り、真理などといったものに逃えることは、しばらくの間はその立場に特別な注目と信用を与えるが、人間の歴史の長い道程をみた場合、一方において、他の立場とか主張が徐々に又は急速に消えざるのに反して、もう一方の立場や主張を知的・文化的な力において生き残らせ、成長させるものは、実際の人間の経験を説明し、解釈し、その方向

づけをする（想像）力だけなのである。我々の宗教的行為が、結局は我々自身の想像的・知的・個人的・共同社会的な行為であり、決して究極的実在の直接的反映とか表現などではないのだということを認めるることは、我々に出来るだけ立派な仕事をさせるということにおいて大変役立つばかりでなく、我々自身のものは大変異なつた視点から得られる洞察と理解に対しても、出来るだけ我々の心を開く用意をさせるということにおいても大変役に立ち得るのである。

私はここで、お互いに異なる宗教的伝統を代表する人々が共に対話をを行うことが何故重要であるのかといふことについていくつかの結論的な意見を述べたいと思う。我々の対話が何故重要であるのかというならば、それは我々がどの様な伝統の中にいようと、絶対的あるいは最終的な真理というものを誰も持ちあわせていないからなのである。つまり、せいぜい我々が持ち得るものは我々の祖先の洞察や理解であり、これらは全てその時代における彼等の経験や、その時代に直面した諸問題などの影響の下に形成された彼等自身の想像的構築物であつ

たわけで、まさにそれ故に有限であり、限定的、相対的なものなのである。これらの洞察と理解は、構成された時以来、歴史の過程において想像力に富んだ他の創造的人物によって修正され、増強され、変更を加えられてきたのであるが、これらの洞察や理解にしても、他の全く異なった伝統の中で発展した洞察や理解、視点や世界観などに接することによって利益をうけることが出来るのは確かなことである。従つて対話は我々全てにとって価値あるものと言えるだろう。現代において我々が直面する諸問題——核による大惨事において我々が人類を絶滅させるかも知れないという可能性にまで及ぶ問題を含めて——が要求してくることは、我々が今日の世界における指導原理を発見しようとするにあたり、人類がその長い歴史の中で積み重ねて来た叡知とか献身とか洞察といったものの全てを我々が持ち寄ることなのである。お互いに対話をを行い、どんなに異なる富を各々の伝統が持つてしようと、それをお互いが使用出来る様にしたり、お互いから学べるものを探りながら、この様なことをしないで済ますわけには全くいかなくなつて来て

ある人世指導を与える一つ、あるいは一群の世界観を組み立てるために我々は更により良い立場に立つことが出来るであろう。

人類というものはその歴史の殆んどの過程を見た場合、世界における様々な地理的状況の下に極めて多様な仕方で発展を遂げたが、特に二十世紀においてそれは一つの人類 (one humanity) へと共に成長を遂げて来たのである。今や核戦争の脅威は、我々が好むと好まざると拘らず、決定的に一つの共通の運命のもとに我々全と一緒に縛りつけてしまったのである。従つて、我々が受けついでいた視野の狭い宗教的・文化的伝統 (the parochial religious and cultural traditions) だけを基礎にして、單に、無批判的に生存を続けることはや可能ないとでも又望ましいことでもないのである。お互いに対話をを行うこと、お互いに理解し合おうとすること、我々自身の視点のもつ長所と同様、短所と問題点をもお互いにさらけ出すこと、我々自身のものはかなり違う立場のもつ洞察と視点を評価することを学ぶこと——、こういった種類の動きが今や我々全てに求められて

いるのである。

又、この対話というものが今日どの様な方向に向かうべきかについても明確にすべきである。我々は単に自分自身のものと異なる見地に関する情報を得る目的だけで対話をすることはならないのである。我々が共に話合わせなければならないのは、それによって今日人類——勿論我々を含めて——が現代世界において人生の指導原理を発見する前例のない諸問題の中であつて、眞の指導を与えてくれる宗教的枠組を我々が組み立てることが出来る様にするためにこそ対話が必要となるのである。かくして私は、人類がその長い歴史の中で創りあげたいくつかの偉大な宗教的伝統のもつ基本的様式と構造をいかに認識するかを学ばなければならない。いいかえるならば、(もちろんの伝統の) 基本的カテゴリ構造と私が呼んで来たものを認識する方法を学ぶことである、これによつて我々はお互いのカテゴリ構造を直接比較し合い、今日の人世指導の枠組としてのそれぞれの長所と短所を評価することが出来、かくして現代世界における意義

#### 〔訳者あとがき〕

ゴーラン・D・カウフマン (Gordon D. Kaufman 1925~) 教授はキヤンサス州ニュートンに生れ、両親はメノナイト派 (Mennonite) のキリスト教徒。ベセル・カレッジ、ノースウェスタン大学 (社会学修士号) を経てエール大学神学部で神学生号を得た後、一九五五年宗教哲学における学位論文 [The Problem of Relativism and the Possibility of Metaphysics] で同大学より哲学博士号を取得。この間、一九五三年にメノナイト派教会の牧師となると共に、ボモナ・カレッジの助教授となる。ヴァンダービルト大学の助教授を経て一九六九年にハーバード大学神学部教授となり現在に至る。アメリカ神学会会長 (一九七九~八〇)、アメリカ宗教学会会長 (一九八一~八二) などを歴任。インド、英国などの大学で神学を講

じたが、一九八三年の秋、同志社大学神学部客員教授として来日。仏教関係のリサーチを行うかたわら、東京、京都などで講演。平和主義者、歴史主義者として、キリスト教を含む世界宗教が現代相応の世界觀を人間の想像力によって構築し、宗教間対話を通じて核による人類滅亡を回避するための方法を模索すべし」とを強調した。主な著書は、*Relativism, Knowledge and Faith* (1980), *Systematic Theology: A Historicist Perspective* (1968, 1978), *God the Problem* (1972), *An Essay on Theological Method* (1975, 1979), *The Theological Imagination: Constructing the Concept of God* (1981) など。

本稿は、一九八三年十一月十五日、東京で行われた東洋哲学研究所主催の公開講演会における講演原稿である。

(ムニヤハ ジョウ・法政大学講師)